

南木佳士「急須」論

— お茶屋の主人の役割に関する考察 —

和田 崇

【要旨】

本稿は、現行の筑摩書房の国語教科書（高校一年生用）に収録された南木佳士の短編小説「急須」を分析した作品論である。同社の作成した『指導書』によると、この小説の主題は、青少年期の苦悩を背景として主人公が「自分の生き方を発見するという成長の物語」であり、それを読み取るためには、作中に登場する「お茶屋の主人」と、彼が愛好する芥川龍之介の小説が象徴する意味を考察する必要がある。しかし、テキストを精緻に分析すると、お茶屋の主人は主人公の「成長」に対しそれほど重要な役割を果たしていないと考えられる。本稿では、テキストに描かれていない主人公の空白の時間を復元し、彼の苦悩の所在を具体化した上で、人称を用いず過去の自己について語る特殊な語り手の機能に着目し、現在と過去との間で二重に交錯する主人公の内面的変化を解析することで、「急須」におけるお茶屋の主人の役割を明らかにした。

【本文】

一 はじめに

南木佳士の「急須」は、『文學界』一九九六年七月号に発表され、『冬物語』（文藝春秋、一九九七年二月刊）に収録された短編小説である。初出と単行本を比較すると若干の異同^①が見られ、その後、単行本を底本に

文春文庫版『冬物語』（文藝春秋、二〇〇二年一月刊）と『熊出没注意—南木佳士自選短篇小説集—』（幻戯書房、二〇一二年二月刊）に再録された。

あらすじを確認しておこう。幼少期に母方の祖母に育てられた主人公は、母の死後すぐに再婚した父と祖母の折り合いが悪く、不安定な家庭環境の下で急須磨きという変わった趣味を持っていた。しかし、中学一年の終わりに父の転勤で東京へ行くことになり、新生活を迎えるため急須磨きと決別する。それから十年後、秋田で医学生となった彼は、医学部で学ぶ意味を見失っていた。毎日を無為に過ごす中、芥川龍之介を愛読する主人公が営むお茶屋で急須を購入し、主人と芥川について語り合った後に再び急須磨きを始めた。毎日の焦燥を消し去るように急須磨きに没頭する中、臨床講義のため数か月ぶりに授業へ出席した彼は、そこで患者として招かれたお茶屋の主人と再会する。そして、戦争の負傷が原因で肺の小細胞癌になった主人の過去と重い病状を聞いた後、彼は医学を学ぶ意義に気づき、それから完全に急須磨きをやめたのだった。

この作品は、筑摩書房の教科書『精選 国語総合 現代文編』（二〇一二年三月検定済、二〇一四年一月刊）の〈小説三〉として、遠藤周作の「カプリンスキー氏」とともに収録^②されている。同書の旧版である『精選 国語総合「改訂版」現代文編』（二〇〇六年三月検定済、二〇〇九年一月刊）の〈小説三〉に収録されていたのは、準定番教材である太宰治の「富嶽百景」一作のみであったことから、両作品の収録には、新しい教材を取

り込もうとした編集の意図が読み取れる。また、大修館書店の『新編 国語総合』（二〇一二年三月検定済、二〇一三年四月刊）に随筆「コルベ神父」が収録されている遠藤に対し、管見の限り現行の高校国語教科書で南木の作品を採録しているのは筑摩書房のみであり、「急須」は新鮮な教材であると言えよう^⑤。

では、「急須」は教材としてどのように位置づけられているのか。『精選 国語総合 学習指導の研究 現代文編3』（筑摩書房、二〇一三年三月刊）（以下『指導書』と略す）の「教材のねらい」によると、「青少年期の、自分は何をすべきかという迷い、苦悩による現実逃避と、それらの苦悩を背景として自分の生き方を発見するという成長の物語」という解釈が主題に据えられている。そして、学びの留意点として、「①主題と関連する比喩や象徴的な意味について考えさせる。——「急須磨き」や芥川の小説『秋』の役割と効果」と、「②登場人物の思考や心理をたどり、作品世界を想像するとともに味わう。——主人公の「苦悩」と「成長」の二点が挙げられている（指導書161頁）。

『指導書』が提示する「主人公の苦悩と成長の物語」という主題を異論のないものとして受け入れるとして、本稿では、学びの留意点①の「急須磨き」と「芥川の小説」の役割と効果に着目したい。とりわけ後者については、主人公に芥川の話題を提供する「お茶屋の主人」に置換して考えたい。なぜなら、急須磨きという行為と、お茶屋の主人の存在は、この小説を構成する重要な虚構だからである。

南木の小説のほとんどは自身の経験を軸とし、そこに何らかの創作的要素を付与することで構成されている。実際、鉦山勤めの父が婿入りするも「妻に先立たれてしまい、その後再婚して家を出た」ため、幼少期に「群馬の山村の古い家」で母方の祖母に育てられたこと（140～142頁）^④や、「中学一年の終わる春」に「東京に出ていた父について転校」したこと（143頁）、

「秋田で医学生として暮らし」たこと（144頁）など、「急須」の主人公の設定は、南木が多くの随筆で語っている自己の生い立ちと一致する^⑤。反対に、急須磨きの趣味や芥川の小説を愛好するお茶屋の主人と出会ったことは、管見の限りどの随筆でも確認できない。そのため、急須磨きとお茶屋の主人は虚構と認定することができよう。

では、この急須磨きとお茶屋の主人を「主人公の苦悩と成長の物語」という主題と照らし合わせた場合、これらの設定は果たして効果的に機能しているのだろうか。結論を先ずれば、テクストを分析すると、少なくともお茶屋の主人の存在は効果的に機能していないと言える。もちろん、あらずして示したように、お茶屋の主人は、主人公が急須磨きを再開するその急須そのものを販売し、臨床講義で余命三ヶ月の癌患者として現れるなど、登場人物としてのインパクトは強い。しかし、それと主題における役割や効果は別個に考える必要がある。

よって本稿では、南木佳士の短編小説「急須」について、急須磨きとお茶屋の主人という二つの虚構の役割や機能に着目し、『指導書』の解釈とも照らし合わせながら、同書の提示する主題との関連性を考察したい。

二 「都落ち」とデカダンス

急須磨きとお茶屋の主人の役割について分析する前に、まず、これらの行為や人物との出会いを遂行する主人公の人物設定を確認しておきたい。

急須磨きの再開の有無にかかわらず、秋田で医学生となった主人公は大学の講義にほとんど出席せず、軽症うつ病となり、毎日デカダンな日々を過ごしていた。主人公が大学へ行かない理由について、作中では次のように語られている。

大学に行くつもりはあり、行かなくてはと六畳一間のアパートで目覚めはするのだが、蒲団の中で退屈な教室の様子を想像してしまうともうだめで、そのまま膝を抱えて再び眠ってしまうのだった。刺激の少ない北国の小都市での生活にすっかり飽きていたし、このまま漫然と医者になってしまふことへのためらいもあった。(144頁)

では、そもそもなぜ主人公は秋田の医学部に進学したのか。その理由は次のように語られている。

金のない家に生まれ育ったので、好きな文学を勉強できるほど恵まれた境遇にないのもよく理解できていた。だからこそ、適当に講義でも聴いて医者になって、そこそこの中流生活を営めば十分と納得して東京から秋田まで都落ちしてきたのだった。(150頁)

右の引用で明らかなのは、文学部ではなく医学部、そして秋田という地方の大学への進学が、主人公にとってとにも不本意で妥協的な選択であったことだ。また、大学へ行かない理由も「漫然と医者になってしまふことへのためらい」を感じ、「刺激の少ない北国の小都市での生活にすっかり飽き」というように、妥協的な進学に呼応しているのである。

しかし、経済的理由によって文学部への進学を断念したことは軽症うつ病を発症する要因として納得できるものの、「北国の小都市」や「都落ち」という言葉で表現される地方の生活に対する嫌悪や蔑視には、あまり迫真性を感じられない。「群馬の山村」で育った主人公ならば、田舎への適応能力もあるだろう。なぜ、秋田の地方性をそこまで強調する必要があるのか。

南木佳士は「急須」の自作解説で、「上州の山村で生まれ育ったくせに、

中学二年になる春に東京に出たものだから、秋田の医学部にしか合格できなかったときは、いっばしの都会人のように、都落ちの悲哀を覚える者としておのれを規定した」^⑥と述べている。「秋田の医学部にしか合格できなかった」とあるように、南木は大学受験にともなう挫折感を「都落ち」という言葉に象徴させ、それを具現化する町として秋田を規定しているのだ。先に南木作品の私小説性については言及したが、もちろん、仮に私小説的な作品であったとしても、作者の情報をそのままテキスト分析に应用することはできない。だが、この挫折の象徴としての「都落ち」は、実はテキストからも読み取れるのである。

それを説明するため少し物語を遡ろう。作品の冒頭、「小学生の頃」の主人公の日常を描写する場面で「テレビのない時代だった」と語られている(140頁)。「指導書」に書かれているとおり、「テレビの普及は、皇太子ご成婚(一九五九年)から東京オリンピック(一九六四年)の頃」であり、「テレビのない時代」とは「一九六〇年以前」と考えることができる(指導書171頁)。作者自身に照らし合わせれば、一九五一年生まれの南木は五七年に小学生となっている。実際に、テレビ登録世帯数は、五八年によりやく一〇〇万を突破し、皇太子ご成婚一週間前の五九年四月三日に二〇〇万と倍増、同年一〇月に三〇〇万に急増した^⑦。

このように時代設定を確認したのは、主人公の大学受験の時期を明らかにしたかったからである。作品内の時間軸は実証的にもほぼ作者自身の経歴と一致することから、主人公は一九七〇年頃に大学受験をしたことになる。当時、大学入試は三月上旬と下旬の二期に分かれ、受験できる大学も一期と二期で限られており、この制度は七九年一月の共通一次試験(その後、九〇年一月にセンター試験となる)の開始まで存続した。当時の様子を、南木自身は次のように回想している。

私が大学を受験した頃、国立大学には一期校と二期校の区別がはっきりとあった。旧帝大はすべて一期校であり、ほとんどの地方大学は二期校だった。(中略)二期校には失敗を経験した若者たちが集まった。私も文字どおりの都落ちで、東京から東北の二期校に入学した。^⑧

「急須」に登場する「秋田の大学」のモデルは秋田大学であり、同校は二期校に属した。戦後の受験制度によって生み出されたヒエラルキー意識の中で、主人公は秋田を「都落ち」という挫折の空間に規定したのである。

また、初読では看過されてしまいそうだが、この主人公は大学入試に際して一年浪人をしている。「中学一年の終わる春」に、東京への転校を前にして急須磨きと決別し、「再び急須磨きを始めたのはそれから十年後、秋田で医学生として暮らして四年目の秋だった」(144頁)と語られていることから、主人公は二十三歳で大学四年生となっている^⑨。浪人をした末に「都落ち」をした主人公の挫折感は、こうして前景化するのである。

和 さらに、主人公が文学部に進学できなかった経済的理由についても補足しておきたい。作中で「群馬の山村」と語られる南木の故郷は、群馬県吾妻郡嬭恋村である。同村は高原キャベツの産地として著名だが、かつては鉱業、とりわけ硫黄鉱山で繁栄した。主人公の父が事務職として転勤する「東京の鉱山会社」(143頁)は、嬭恋村にあった三つの硫黄鉱山のうち、最大規模であった小串鉱山を経営した三井系の北海道硫黄株式会社をモデルにしていると考えられる。同鉱は一九五五年下期から輸入され始めたアメリカの安い硫黄などの影響を受け、徐々に衰退し、七一年六月をもって閉山した^⑩。この閉山の時期は、先に確認した主人公の大学受験の時期とほぼ重なる。仮に嬭恋村や北海道硫黄という作者の情報から得られる固有名を除外したとしても、日本全体で国産の鉱物需要が減少する中で、主人公の父が勤務する会社の経営状態が悪化したことは容易に想像がつくであ

ろう。浪人した上に家庭の経済状況を考えると、主人公の進路選択は限られたのだ。

以上のように、「都落ち」をしてデカダンな生活を送る主人公の背景には、浪人と二期校への進学という二重の挫折感があり、扶養者である父が務める鉱山会社の衰退も相まって、より主人公の焦燥を駆り立てたのである。

三 急須磨きの再開の原因

前節で論じたとおり、主人公は大学受験の挫折がもとでデカダンな生活を送るようになった。一方で、「大学に行くつもりはあり、行かなくては」^⑪との焦りも感じている。そして、この焦燥を拭い去るために急須磨きが開始される。では、なぜ十年間もおさまっていた行動を再開せねばならなかったのだろうか。

そもそも、幼少期の主人公にとって、急須磨きは趣味であると同時に現実逃避の手段でもあった。この点について『指導書』は、志賀直哉の「清兵衛と瓢箪」の主人公のような美的追求と、不安定な家庭環境の下での自己防衛の方策という二点から、急須磨きの理由を指摘している(指導書161・173頁)。これ以上補足のいらぬ確な解釈である。

ところが、医学生となった主人公が急須磨きを再開する理由については判然としない。反芻すると、主人公は毎日を無為に過ごす中、偶然入った貧相なお茶屋で急須を購入し、芥川龍之介が好きな店の主人との芥川談義に夢中になった後、帰宅したその日の夜に急須磨きを始めている。時系列上、お茶屋の主人との芥川談義が急須磨きを促したことは間違いないが、それを原因と結果の関係において直接的に結びつけることはやや困難である。

ここで、急須磨きを再開する直前の描写を確認しておこう。

正体不明の主人と文学の話をしたあとには、不思議な満足感とともに、手すりのない階段に足を踏み降ろしてしまったような全身で覚える頼りなさの感覚が残った。だから、アパートに帰る暗い裏道を、いつもより固くハンドルを握って自転車をこいだ。(149頁)

『指導書』でも、急須磨きの再開の原因を尋ねる端的な発問や答えは設けられていない。ただし、記述内容を総合すると、おそらく次のような解釈を提示していると考えられる。まず、「お茶屋の主人にとっての芥川作品、特に『秋』が、主人公にとっての「急須磨き」にあたる」と、両者を等価なものとみなす(指導書161頁)。そして、「芥川を通してバランスを求めている」お茶屋の主人に対して、「自分との共通点を見出し」、そうすることで、「自分がいかに不安定な状況に置かれていたかを自覚」し、右の引用文のように「頼りなさの感覚」を覚える」というのである(指導書179頁)。

ここで問題としたいのが、お茶屋の主人が「芥川を通してバランスを求めている」という解釈である。主人にとっての芥川作品と主人公の急須磨きは等価であるという前提があるため、「バランスを求めている」とは、主人が芥川作品で心を安定させようとしているという意味であろう。テクストにおいて、たしかに主人は「急須はバランスが命」や「何事もバランスが基本」、「芥川の文章はバランスがいい」と発言している(146〜147頁)。しかし、だからといって彼自身が「芥川を通してバランスを求めている」とはすぐに読み取れない。おそらくこの解釈は、後に臨床講義で教授の口から説明される「高校の国語の教師として東京で暮らしていた」が「両親が老いて病気がちになったために秋田にもど」ったこと、「結核のために

婚期をのがし、現在も独身である」こと、治療の困難な「肺の小細胞癌」に冒されていること(154頁)など、主人に関する来歴を総合して導き出されたものである。なるほど、それならば東京で国語の教師を続けるはずであった時間を喪失し、その空虚さを埋めるために「芥川を通してバランスを求めている」と理解できる。

ただし、仮にお茶屋の主人が「芥川を通してバランスを求めている」としても、それに主人公が気づき、「自分との共通点」を認識することはできない。なぜなら、芥川談義をした時点では、彼はまだ主人の過去を知らないからである。次節で述べるように、この小説の語り手は不特定の現在から過去を回想する主人公そのものであり、語る現在の視点であれば、彼はバランスを介した主人との共通点を見出しているかもしれない。しかし、主人との芥川談義を遂行したばかりの語られる過去の主人公は、それを認識しようがない。「正体不明の主人」と表象されているのもそのためである。よって、主人公が芥川談義を通じて「自分がいかに不安定な状況に置かれていたかを自覚」という解釈も、それが主人公の内面で自発的に生じたものならともかく、「共通点を見出」すというような、お茶屋の主人(他者)に触発されて生じたものだとするのは無理があるだろう。そもそも主人公が急須を磨く行為は、精神分析でいうところの防衛機制にあたる。フロイトによれば、「自我そのものの中に」は「意識されないものであり、ちょうど、抑圧されたもののようにふるまうものであり、いかえれば、みずからを意識することなしに強い作用を示すもの」が存在し、「それが意識されるためには、ある特別の作業を必要とする」¹⁾という。人間は無意識に生じる不安や葛藤が意識に浮上しないように、何か別の対象に置き換えることで回避するのであり、それが主人公の場合は急須磨きだった。つまり、急須磨きはいくまで行為を遂行する自己の内面から生じる問題なのであり、その原因を探るためには、主人公自身の変化を追

うことが重要となる。

ここでもう一度、前節で引用した主人公のデカダンな生活の描写に話を戻したい。先述のとおり、急須磨きが再開される以前から主人公は退廃的な生活を送っていた。加えて、大学へ「行かなくては」という焦燥感を抱いていた。とすれば、この時から既に急須磨き以外の何らかの防衛機制が働いていたはずである。

理由は後になればいくらでもつけられるのだが、このときはただ行きたくても行けなかったのである。大学に向かって自転車をこぎ出すと頭痛や吐き気がし、遠ざかれば症状は消えた。いかにも勝手すぎる体だとあきれ果てはしたものの、実際に気分が悪くなってしまいうのだからどうにもならず、アパートの万年床に引き返して小説など読むしかなかったのだった。(144頁)

崇 田 和

右の引用は、お茶屋の主人と出会い、急須磨きを再開する以前の主人公の日常を語ったものである。この引用の直後に銭湯の一番風呂に入る描写があるため、それも心身をなぐさめる行為として認めてもよい。だが、ここでは特に傍線を引いた小説を読む行為に注目したい。なぜなら、この行動は急須磨きの再開後にも確認できるからである。

おまえはなにをしているのだ、とのたまらない焦燥を誘う内なる声が聞こえ出す前に、せっせと急須磨きを開始し、飽きると文庫本の小説を読み、また磨き。(150頁)

大学へ行くことができず精神が不安定になった主人公は、小説を読むことで気を紛らわせた。そして、急須磨きを再開した後も、その合間には文

庫本の小説を読んでいる。つまり、主人公にとって急須磨き以外で自我を防衛する手段は、小説を読むことなのである¹²⁾。それが、好きな文学の話をする友達もない秋田で、たまたま入ったお茶屋で主人と芥川談義をしたことで、思いもかけず「不思議な満足感」を得るほど満たされた。だが一方で、大学へ行けない自己を抑制する文学的欲求が一時的に増幅したため、その反動で抑制されていた不安や葛藤も膨張してしまった。「頼りなさの感覚」とは、満足感により強化されたエス(無意識の中に潜む本能的衝動)がこれまで以上に代償行為を要求することで、まさしく主人公の身心が揺さぶられている状態を指す。当然、これを抑えるには小説を読むだけでは不十分で、幼少期にとられた急須磨きが自我を防衛する方策として付け加えられる必要があったのである。

以上のように、医学生となった青年期の主人公は、小説を読むことで精神をかううじて安定させていた。しかし、お茶屋の主人との芥川談義を経て、小説を読むという文学的欲求が過剰に満たされ、その反動として増幅した不安や葛藤に対し、急須磨きを再開させることで崩れそうになる自我を保護したのである。

四 急須磨きと決別できた要因

前節で論じたとおり、急須磨きの再開の原因はあくまで主人公の内面にあり、お茶屋の主人はそのきっかけを作ったに過ぎなかった。主人は「自分との共通点」を見出させるほどには、他者として主人公の内面に干渉しておらず、あくまで役割は機会作りに限定されている。そして、この主人の役割や機能の弱さは、クライマックスである主人公の急須磨きとの最後の決別にも見られる。

物語を順に追っていくと、急須磨きを再開した後、およそ三ヶ月の間

大学を欠席した主人公は、人数が欠けると困るといふ級友の依頼に仕方なく大学の臨床講義に出席し、そこで患者として運ばれてきたお茶屋の主人と再会する。そして、臨床講義の後、次のように大学へ行くことを決意する。

初めて聴いた臨床講義であったが、患者がたまたま知った人だった
 という以上に、医学がまさに生きている人間を扱う学問なのだとの印象を強く与えてくれた。学ぶべきものの輪郭が見えてきた。この講義を聴くために大学に行こう。いつまでも急須を磨いているわけにはいかない。(155頁)

「以上に」へ傍線を引いたように、主人公にとって患者が主人であったかどうかは問題でない。極端な言い方をすれば、重症患者であれば誰でもよかったのである。そもそも、主人公は「医学部」というところはもう少し生身の人間の生死にかかわる問題を学ぶところとわずかな期待を抱き、それが「見事に裏切られた」(151頁)ためデカダンな生活を送るようになっていた。二つの引用で波線部が呼応するように、この期待さえ満たしてくれる患者であれば、彼は必然的に大学へ行く活力を取り戻したのである。

もちろん、結末部の描写で、主人公は急須を割るかどうかで悩み、その急須は「お茶屋の主人がバランスを保証してくれたもので、死にゆく彼の唯一の接点であった」「そう思うと捨てられなかった」と語ることで、主人への愛着は示されている。しかし、先述のとおり、主人公が急須磨きをやめることができたのはあくまで臨床講義で「生きている人間を扱」えたからであり、急須そのものを残す理由とは連関しない。ここでも、主人公は「患者」としてきつかけを作ったに過ぎず、急須磨きとの決別に対して、固有の登場人物として特別な役割や機能は担っていないのである。

この解釈を補強するために、このテキストの語り注目したい。一読してわかるように、この物語は主人公が医者となった不特定の現在の視点から過去の自分を回想する形式で語られている。ただし、語り手が「私」や「僕」といった一人称で過去の主人公を統括していないため、つまり、語る側も語られる側にも人称がない¹³ため、語りを行っている時空間と語られる主人公の時空間の内面との間に、二重の主体が垣間見られる。

婿としてこの家に入ったものの、妻に先立たれてしまい、その後には再婚して家を出た彼の複雑な立場がおぼろげながら理解できるようになったのは大学生になってからのことだった。(142頁)

午後三時になると銭湯が開く、老人たちと一番湯に入った。すると心身ともにすっきりしてなんでもできそうな気になってくる。なんのことはない、朝悪くて午後から夕にかけて気分が回復してくる軽症うつ病そのものなのであるが、不勉強で無自覚な医学生が気づくはずもなく、なんとかその日その日をなだめ暮らしていたのだった。(144頁)

右のように、語り手は基本的に過去の自分自身へ内的に焦点化しながらも、時折、語る現在の視点から客観的に状況を分析しようとする。注(1)で既述のとおり、単行本収録の際に右の二つの引用の一部を改稿したのも、語り手の機能を意識してのことだろう。この主体の二重性が、このテキストにおける語りの特徴であり、前節で論じたように過去の主人公の内面を捉え難くしているのである。

「急須」のテキストを通じて、読者は現在の語り手により整理された過去を追体験する。そのため、語り手の記憶に強く残った芥川談義と余命三

ヶ月の癌患者という主人の形象を享受し、同時に、急須磨きとの決別という成長の記録が語られることで、読者は両者に因果関係を持たせようと欲望してしまうのではないか。だが、先述の「以上に」に見られたとおり、語り手は決して恣意的に両者を結び付けようとはしておらず、お茶屋の主人のエピソードと自身の成長過程とを並行して語っている。両者の空隙を埋めるのは、あくまで読者なのだ。

こうした語り手の冷静さに気づくと、次のような描写も見えて来る。

講義に出ないのは自分の勝手だが、班の者たちに迷惑をかけるのは本意ではない。行くしかないか、とすこぶる消極的な背伸びをしてから、その夜、診察手技の教科書を引っぱり出して自分の腹をなでさすりながら急ごしらえの触診の練習をした。

翌日、臨床講義は午後一時からの開講だった。数カ月ぶりに教室に入ったのだが、級友たちは気持ちよいほどに無関心でいてくれた。白衣を着て階段教室の最前列に座り、講義の開始を待った。(152頁)

本稿の三節で引用したように、大学の授業に意義を見出せなくなった主人公は、「大学に向かって自転車をこぎ出すと頭痛や吐き気がし、遠ざかれば症状は消え」という軽症うつ病を発症する。急須磨きを再開することで自我を保護し続けていた主人公が、精神的には以前と変わらない状況であれば、右の引用の改行部に「頭痛や吐き気」の症状が現れるはずである。ところが、主人公は「消極的」ながらも、「階段教室の最前列」に鎮座している。症状部分は省筆されたなど、解釈はさまざまに成り立つであろうが、冷静な語り手を信頼するならば、彼は苦痛を伴わずに大学の教室まで来ることができたのだ。そして、その原動力となったのが、臨床講義という「生身の人間」を招いて行う授業への期待であり、急須磨きとの決

別への予兆は、既に大学へ向かう時に現れていたのである¹¹⁾。

以上のように、主人公が大学の授業へ出る意欲を取り戻したのは、「生きていく人間を扱う学問」という彼の医学部に対する期待が満たされたからであり、臨床講義の協力者として現れたお茶屋の主人は、急須磨きとの決別に特化すれば、「患者」としてその機会を与えたに過ぎなかった。語り手である現在の主人公の記憶に、わずか二度しか会わなかった主人の印象がどれだけ鮮明に残っていたとしても、それは急須磨きをめぐる彼の成長と別個に捉える必要があるのだ。

五 おわりに

本稿では、主人公が浪人している設定や防衛機制としての読書、語られなかった症状への着目など、テキストから推察し得る情報を補助線として、「急須」におけるお茶屋の主人の役割について考察した。

論証の過程で、主人公の成長の全てをお茶屋の主人からの影響に帰する読者の存在を仮定し、また、『指導書』の解釈との差異を示した。だが、本稿は決して小説の欠陥や『指導書』の解釈を批判するものではない。一見単純に見える物語の空隙を埋めていけば、新たな解釈を提示できる可能性を示したかったのである。本稿は、筆者(和田)が高校教員として最後に担当した一年生の生徒たちと、この「急須」のテキストを共同して読解した授業実践が土台となっている。多様な読みを提示した優秀な生徒たちに感謝するとともに、本稿によって「急須」が持つ文学教材としての可能性も提示できたと考えている。

【注】

- (1) 異同は二ヶ所確認できる。一つは、主人公の生母の死後、すぐに再婚をした父が母方の祖母に対して「複雑な立場」にあることが「おぼろげながら理解できるようになったのが、初出では「ずっとのちのこと」となっているのに対し、単行本では「大学生になってからのこと」となっている。もう一つは、医学生になってから軽症うつ病になり、ふしだらな生活を送っていたことを回顧する場面で、初出では「なんとかその日その日をうっちゃっていた」であるのに対し、単行本では「なだめ暮らしていた」となっている。
- (2) 教科書のテキストの底本は文春文庫版であり、収録に際して「めし」を「飯」にするなど、平仮名が漢字に直され、「坐って」を「座って」とするなど、常用外漢字が常用漢字に改められている。
- (3) ただし、以前、第一学習社の『高等学校改訂版現代文』(二〇〇七年三月検定済、二〇〇九年二月刊)に南木の短編小説「ウサギ」(『文學界』一九九六年六月号)が収録されていた。しかし、作中においてテレビドラマ『ひとつ屋根の下』で酒井法子が発したセリフの引用が重要な位置を占め、同女優が覚せい剤取締法違反で逮捕された影響か、現行の教科書には収録されていない。
- (4) 本稿における「急須」の引用には、教科書の底本である文春文庫版『冬物語』を用いており、頁番号は同書のものである。また、以後の引用文中の傍線は全て引用者(和田)が引いた。
- (5) たとえば『ふいに吹く風』(文藝春秋、一九九一年二月刊)に収められた「ゆるやかな助走」では、「小学校の教師であった母は私が三歳のときに結婚で死んだ。以降、再婚した父とは離れ、姉とともに祖母の手で育てられていた」と回想されている。その他、南木の随筆におけるこのような記述は枚挙にいとまがない。
- (6) 「作品の履歴書としてのあとがき」(『熊出没注意』前掲)。
- (7) 志賀信夫『昭和テレビ放送史(上)』(早川書房、一九九〇年七月刊)二二〇頁。
- (8) 「一期校と二期校」(『ふいに吹く風』前掲)。国立大学入試の「一期校、二期校制」は一九四九年の学制改革から始まり、南木が述べているように「旧帝国大学がすべて一期校であり、一期校は一流校、二期校は二流校との印象を与えていた」(中井浩一『大学入試の戦後史』中公新書ラクレ、二〇〇七年四月刊、二二二頁)。
- (9) 作者の南木も実際に浪人しており、このことも前掲の「ゆるやかな助走」のほか多くの随筆で記されている。また、小説「ウサギ」の主人公は浪人して予備校に通い、「東北の新設医学部」に入学する。
- (10) 『婦恋村誌 上巻』(群馬県吾妻郡婦恋村役場、一九七七年三月刊) 954頁、955頁を参照。ちなみに、婦恋村における職業別人口は、一九六〇年のピーク時には農業に次いで鉱業が二番目に多く一四六五人いたのに対し、七〇年には六七三人に減少して比率もサービスマンに抜かれている(同書35頁)。また、日本の硫黄生産高は、五年のピーク時には約一億四千万トンあったのに対し、六五年には約二十一万トンにまで減少していた(同書954頁)。
- (11) 「自我とエス」(フロイト著作集第六巻)人文書院、一九七〇年三月刊 268頁。
- (12) テキスト分析の材料にはできないが、南木自身も「歩いてから読む水」(岩波文庫編集部編『読書のすすめ 第9集』二〇〇四年五月刊)において、「高校時代に芥川龍之介の小説を文庫で手に入るかぎり読んで、それが「ちょっとだけ複雑な家庭環境から逃れるための格好の手段だった」と回想しており、現実逃避の方策として小説を読んでいたことがわかる。
- (13) 南木の初期の小説では、自己語りの場合は「ぼく」という一人称を用いており、第五三回文学界新人賞を受賞した「破水」(『文學界』一九八一年十二月号)や第一〇〇回芥川賞を受賞した「ダイヤモンドダスト」(『文學界』一九八八年九月号)、映画化された「阿弥陀堂だより」(『文學界』一九九五年三月号)など、著名な作品は全て三人称小説である。このように無人称で自己を語る語り手は、「ニジマスを釣る」(『別冊文芸春秋』一九八九年秋号)や「試みの墮落論」(『文學界』一九九二年四月号)などで次第に現れ、「急須」が収められた短編集『冬物語』では、収録された全ての作品がこの形式で書

かれています。

(14) ちなみに、南木は『冬の水練』(岩波書店、二〇〇二年七月刊)に収められた「臨床講義」という随筆において、大学に入学して「五年目のある日」、臨床講義で「色の白い中年の女性患者」を診察し、「艶のよい頬をした」彼女が「白血病」であると聞いて「満員の教室がどよめいた」様子を回想し、「医学がまさに生身の人間を扱う学問なのだとの印象をこの臨床講義で深く植えつけられたのだった」と記している。もともと作者が臨床講義そのものに深い思い入れがあり、そこへお茶屋の主人という虚構の登場人物が設定されたために、彼が十分に生かされなかったのかもしれない。